

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

B. 円滑な学位授与の促進

⑥その他

《人社系》

●東北大学情報科学研究科

「情報リテラシー教育専門職養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムを実質的に推進するためには、博士学位取得者を数多く輩出することが重要であると認識し、その課題に応えようと複数教員による指導体制や情報教育デザイン特別ゼミナールなどの科目を新設した。しかし、プログラムのスタート以来、博士後期課程の履修者はほぼコンスタントに受け入れ、プログラム自体は十分に機能しているといえるが、遺憾にも平成24年3月末現在でまだ博士学位取得者を出していない。これからの最大の課題である。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

博士学位取得を目指す履修生の多くは、現役の教員でありかつ遠隔地の居住者が多い。実際に蓋を開けてみると、本務の仕事量は膨大であり、そのため研究のための時間を確保することが難しく、三年の期間で研究を实らせることは困難であったようである。遠隔地に居住する履修者に対する研究指導の方法には、e-learnig やメール等によるコミュニケーションが考えられるが、しかし実質的に効果を上げるためには、直接対峙してディスカッションを行い、細部にわたって入念にアドバイス等を行う必要があると感じられた。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

実際の対応として、長期休暇期間を活用し集中的に指導にあたり、またオープンキャンパスの期間に研究発表などを実施し、可能な限り研究の推進を図った。しかし、実情研究に専念する時間は十分には確保できなかったようである。即効的に解決する方法はなく、プログラム履修生が研究活動の時間を少しでも多く確保でき、着実に研究成果を上げられるように支援することが求められる。スタートして実質的におよそ三年が経過し、すでに提出間近の履修生もいる。指導体制の強化を図り、直接的に指導できる機会を可能な限り多く設け、プログラムの期待に応えたい。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

F. その他

①大学院生・研究者等の積極的な受入・派遣等

《人社系》

●東北大学情報科学研究科

「情報リテラシー教育専門職養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムを実質的に推進するために、学部からの進学生だけでなく、学校現場で働く現役教員がプログラム履修生として加わることを重要課題としてみなしていた。そのため、関係機関や教員を中心に広報・周知を図り、その成果もあって毎年特に情報教育に取り組む小中高及び大学教員はコンスタントに入学した。しかし、地元の教員の志願がきわめて少ない。小中高の教員には、今後情報教育や情報リテラシーの習得が何よりも重要なはずであり、本プログラムを通してその教育に携わる能力の向上を期待したが、今のところ実を結んでいない。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

教育委員会との協同事業や研究会など、小中高の教員と話す機会は多く設けている。本プログラムに関心を示す教員は多い。しかし、実際に履修することのできない大きな原因として二つ挙げることができる。ひとつは、大学院での教育研究のために長期休暇を取得することがきわめて難しいこと、そしてもうひとつは、社会人学生として履修することを志望したとしても、博士前期課程の場合必修要件科目が平日の午前・午後の時間帯に開講され、現実上履修は無理であることが挙げられる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

この課題に応えることはきわめて難しい。本プログラムは、実践的活動や取組みなどを重視している以上、e-learning による授業提供は現実的でない。その解決策のひとつとして、前期課程の履修者のうち長年情報教育に取り組んできた教員に対して、それまでの教育実績を評価した上での修了要件単位の振り替え措置を設けるなどして履修の便宜を図り、後期課程に進学しやすくするなどの方策を講じることが考えられる。いずれにしろ、現役教員にできる限り多く取り組んでもらうために、今後実効性のある方策を建設的に提案したい。